

## コロナ禍の上海近況

日中経済協会上海事務所大分県経済交流室

(大分県上海事務所所長) 難波 一尚

新型コロナウイルス感染拡大のパンデミック宣言から一年以上が経ちました。日本を含む世界各国では未だ感染者がなかなか減らず、経済活動に大きな影響を与え続けているところですが、中国では早い段階から感染の抑え込みに成功しており、コロナ前の日常を取り戻しつつあります。

## 【中国の水際対策】

中国では入国者に対して徹底した管理が行われています。筆者は2020年7月に一時帰国から中国上海へ戻りました。入国者は原則14日間の集中隔離となります。渡航当時は中国での感染がほとんど発生していなかったこともあり、7日間のホテルでの集中隔離の後、7日間の自宅隔離が認められていました。

空港に到着したあと順路に沿って、係員との面接、PCR検査を受けたあと、居住する区が指定する隔離施設（ビジネスホテル）へ移動します。乗車するバスを含めて入国者の動線は完全に外部から遮断されており、対応する職員は全て防護服を着用しています。ホテルの部屋に入ると集中隔離期間が終わるまでは出ることができません。



空港から集中隔離施設行きのバス乗り場



集中隔離ホテルの様子

また自宅隔離が認められていたとはいえ、引き続き厳格な管理・監視下に置かれます。ドアにはセンサーを取り付けられ、外出は一切禁止されます。1日2回は区の職員が自宅まで来て体温チェックを行います。

2020年11月30日からは、日中間でビジネス客や居住者の往来の緩和措置であるビジネスラック、レジデンスラックの運用が始まりましたが、PCR検査に加えて抗原検査の陰性証明が求められる、活動範囲が大きく制限されるなど、かなり厳しい管理が行われます。

## コロナ禍の上海近況

日中経済協会上海事務所大分県経済交流室

(大分県上海事務所所長) 難波 一尚

## 【賑わいを取り戻しつつある市内】

こうした厳格な水際対策によりほとんど感染を抑え込んでいましたが、秋頃からは輸入貨物に付着したウイルスから感染するケースなど、中国各地で感染事例が散発しました。感染事例が発生されるとすぐに最小限の区域を封鎖し、感染拡大を抑えこみます。また、輸入貨物に対する管理が強化され、検査・消毒が行われるようになりました。このため輸入に遅れが生じています。



ほぼ満席の飲食店

2020年上半期の飲食業界は打撃が大きく、閉店してしまった飲食店も多くありますが、生き残った店ではこの冬、昨年を大きく上回る売上を記録したところもあるなど、賑わいを取り戻している印象です。

ただ、1月に河北省などで比較的大規模な感染再拡大が発生し、また2月の旧正月休暇、3月の两会開催も控え、大規模なイベントや省間移動を控えるような通達が発出されたため、1月以降、旧正月までは自粛ムードに包まれました。

## 【異例の旧正月休暇】

民族大移動とも呼ばれるほど例年多くの人々が移動する旧正月休暇ですが、今年は国からの省間移動の自粛要請があり、延べ移動人数が例年の4割未満になったと言われています。

上海では多くの店の従業員が帰省せずに留まったため、旧正月休暇中も営業する店が多く、例年は閑古鳥が鳴くような静かさに包まれる上海が、普段どおりに賑わっているという珍しい光景が見られました。

デパートなどの販売は好調で、贈り物用の高価な商品がよく売れたといます。日本酒や焼酎も例年を大きく上回る売れ行きで、在庫切れを起こしてしまう代理店もありました。

## 【日常を取り戻す中国】

旧正月以降は市中感染がほとんど発生していません。3月11日には全人代が閉幕。最も厳重な北京市への出入りも緩和されました。ワクチン接種も進んでおり、コロナ前の日常に戻りつつあるように見えますが、以前はなかった変化も見られます。

健康管理QRコードアプリが開発され、建物に入る場合などに提示が求められるようになりました。市民自らもマスクの着用を徹底するなど衛生意識の向上が見られます。またネット通販の需要が増え、ライブコマースが流行しました。

こうした変化が日常生活の中に浸透し、早くもアフターコロナが始まっているように見えます。経済交流の完全な再開に先がけ、新常态をとらえた新たなアプローチが必要だと感じます。

※写真は上海事務所スタッフ撮影